

「ささやかだけれど、役にたつこと」に見る

normal と common について

本常瑞己

はじめに

“A Small, Good Thing”を含めた Cathedral が出版された 1983 年は、アメリカの労働環境が悪化の一途を辿っていた時期である。特にアメリカ国内の「貧困労働者」の多くにとって、パン屋のようにサービス業に従事し、孤独な人生を送るといったことが、リアルであったことは否めない。1980 年代アメリカは、レーガン政権下で経済成長を毎年続ける陰で、大きな問題を抱えていた。それは貧富の格差の増大である。1970 年代以降のアメリカにおけるハードなものづくり産業社会は、多くの余暇時間をはらんだ。即ち、一部の技術力に長けた高所得者層は、経済的にも富み、その結果としてサービス産業分野の需要が増大した。彼ら以外の労働者の職業は、この需要の膨らむサービス産業に集中する。その結果として、労働者は専門的なスキルを持つ高給管理職と、単純作業な低所得者と二極化した。加えて、他国との競争、特にヨーロッパや日本の自動車産業の台頭のために、雇用や生産拠点を国外に移転や、ロボットの導入による合理化が進められた。いわゆる「産業の空洞化」をもたらしたことで、この二極化に拍車をかけた。大都市は貧困母子家庭が増加したが、レーガン政権は、これらの学校給食への連邦補助などを削減¹した。貧困により落ちこぼれた子供達を、さらに放置するというふうに教育現場の歪みは当時のアメリカの病とも言えるものだった。こうした時代背景を踏まえつつ、本論ではこの作品の精読を試みたい。

¹ 紀平英作編 (2019 年)『アメリカ史 下』山川出版社, 180 頁。

1. 物語のあらすじ

この物語は、アン・ワイズという母親が息子のスコットィーの誕生日ケーキをパン屋で買うところから始まる。アンは、息子の話をしても無愛想なパン屋の態度をみて居心地を悪くするが、誕生日を迎える月曜日にケーキを取りに行く約束をする。ところが、その誕生日の朝、学校に行く途中、スコットィーは車に撥ねられ、病院に運ばれてしまい、父親のハワードも駆けつける。その後彼はシャワーを浴びるために一度家に帰るが、突如として家の電話が鳴り、怪しい人物がケーキについて話し始める。電話の相手はケーキを取りに行かなかった例のパン屋なのですが、父親はそれに気が付きかない。

その後、起きない息子を心配しながらも嫌々に帰宅を余儀なくさせられるアンは、病院の待合室で黒人一家と出会う。アンは、事件に巻き込まれた息子の手術の成功を祈る彼らとの間に共通点を見出すが、結局それ以上の会話ができず、その場を後にする。帰宅するとまたも電話が鳴り響くが、アンもその正体に気がつかない。電話口では「スコットィーのこと忘れちゃったのかい？」という不気味な声を聞き、アンは病院に電話をして息子の容体を確認する。無事との知らせを受け取るが、安心も束の間、病院に帰ってくると、スコットィーが更なる検査をしなければならぬ事を言い渡される。その時、スコットィーが目を覚まし、両親は必死に話しかけるが、直後にスコットィーは息を引き取る。

その後、医師たちは原因究明のため遺体を引き取り、両親はそれはできないと言うが聞き入れてもらえず、両親だけで帰宅する。悲しみに暮れる二人の元に、またも電話がかかってくる。アンは怒りを露わにする。電話が切れた後、その正体がケーキを注文したパン屋であることに思い当たる。そして深夜開店前のパン屋に向かう。乗り込んできた夫婦に対して、冷徹な態度で接するパン屋だったが、母親が怒り任せにより一部始終を話し、パン屋は態度を改める。そして、二人に謝罪をし、自らの生い立ちを話し始める。パン屋は、この歳まで子供を持たず、悲壮感に苛まれながら生きてきたこと、そして、真っ当な生き方を忘れてしまったこと、許してもらえらば自身の嫌がらせを許してほしいというこ

とを伝える。二人は耳を傾ける。そして、何日間も食事を取らずに過ごしていた二人は、パン屋が用意した焼きたてのパンを次から次へと食べ、パン屋と話をし、太陽が昇ってきても誰も動こうとしなかった。以上が物語のあらすじである。

2. 80年代という時代、アメリカという場所

先述した時代背景は、この作品の中にもリアリスティックに書き込まれている。例えば、毎日清潔感を保つハンサムな医者、トラブルを避け続けた経営学修士号を持つ夫ハワード、そしてサービス業に従事する孤独なパン屋という三つの職業は、それぞれの異なる階層の有り様を描いている。

作家本人が経済的にも困窮した人生を送っていることに鑑みると、ここへ書き込まれる諸要素は、彼の現実への問題意識を反映させていると考えることができるだろう。カーヴァーの場合、そこに描かれるのは、外の世界への批判というより自己の内側への意識である。ラリー・マキャフリー（以下 LM）とシンダ・グレゴリーがカーヴァー（以下 RC）に対して行ったインタビューで、次のようなやりとりがある。

「LM あなたの作品のもうひとつ特徴的なところは、あなたの描く登場人物がおおむね、ほかの多くの作家が持ち出す登場人物と趣を異にしていることですね。つまり、基本的に明確にものを表現することができない人々、自分の置かれている苦境を言葉にすることのできない人々、自分に今起こっていることを、しばしば明確に把握することのできない人々。

RC いや、それがとくに「特徴的」だとか、あるいは非伝統的だとか、そういう風には思わないな。というのは、そのような人々を描いているとき、私はこの上なくしっくりとした気持ちになれるからだ。これまでの人生で、そういう人たちをずっと見てきたんだ。そして本質的に私自身がそういう、混乱した、まとまりのない人々の一人なんだ。私はそんな人々の間から出てきたんだ。（中略）そんな生活の中では、昼でも夜でも、ドアがノックされたり、電話のベルが鳴ったり

すると、人々は真剣に肝を冷やす。どうやって家賃を払えばいいのか、彼らには見当もつかないし、冷蔵庫が壊れたらどうすればいいのかもわからないんだ」²。

カーヴァーは、80年代のアメリカにおいて、自身が置かれている状況がどのようなもので、こうした状況に置かれている人々がどのような精神状態で生活するのかということに非常に大きな関心を持ち、彼らを洞察していた。そしてそれは、自身への洞察でもあった。そうだとするならば、物語を読み解くことは、カーヴァー個人のみならず、当時のアメリカ中産階級の人々に歩み寄ることだと言えそうだ。

3. 病院の Normal と共有できない Common

(1) 病院とアン

医師フランシスとアンは物語中、対立的に描かれている。それは、お互いの「普通」が大きく異なるためである。スコッティーが目覚めないことに対して医師フランシスは“They’re as normal as can be”³と話す。

“Normal”という語は経験論的に頻繁な事柄について用いる単語で、フランシスにとってこうしたスコッティーの症状が過去に多く経験されていることが伺える。しかし当然のことだが、息子が普段以上に眠る状態はアンにとって未知の事態である。引用のように昏睡であるかどうか言い争う時、フランシスは、この状態が現時点で昏睡の段階にあるかどうかを意識するが、アンにとってはスコッティーが起きないという事実がある以上、どの時点でも昏睡であると感じている。

こうした経験論的な「普通」が夫婦とフランシスにおいて異なること

² ラリー・マキャフリー、シンダ・グレゴリー著（1987年）『アライヴ・アンド・ライティング—1980年代アメリカ作家へのインタビュー』イリノイ大学出版刊、レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳（2004年）『必要になったら電話をかけて』所収、中央公論新社、228-229頁。

³ Raymond Carver. (2009年) “A Small, Good Thing” *Raymond Carver: collected stories*, The library of America, 411頁。

は、家にも帰らずに日常を逸脱する夫婦と、毎日違うスーツを着て、きれいに髭も剃るという普遍的な日常を過ごしている医師フランシスという対比に顕著に描かれている。フランシスの日常を「まるで今しがたコンサートから帰ってきたばかりのように見えた」⁴と非日常的に見るアンの心境は、この対比の延長線上にあると考えられる。また、医者 の指示で採血をする看護婦と夫婦のやりとりは示唆的である。

“I don’t understand this,” Ann said to the woman [Nurse].
“Doctor’s orders,” the young woman said. “I do what I’m told, They say draw that one, I draw. What’s wrong with him, anyway?” she said.⁵

ここでの“this”とは採血される状況を指す指示語であるが、スコッティに看護婦が施す処置が“Doctor’s orders”と表現されているのも、「指示」という表面上の意味にとどまらず、医師にとっては秩序に則った事であるためだ。看護婦の仕事も、「言われたことをやっているだけ」であり、「血を引いて来いと言われたら、引いてくる」という言い分は合理的である。しかし、誕生日パーティをする筈だったのに、病院のベッドに寝ているという事実が全く秩序立っていない夫婦にとっては、こうした状況を“I don’t understand”と感じざるをえない。

またこの作品では、フランシスの他にレントゲン科や神経科など他の医師が登場する。この病院が総合病院であることを仄めかされていて、そのためにこの病院という空間においては、ヒトの誕生も、ヒトの死も、日常的に起こっていると推察される。ここで、スコッティが誕生日に事故に遭うという点に着目したい。誕生日に死に至る事故に遭遇するという偶然の出来事が、それが普通の出来事である病院に吸収されるような構図になっている。これを強調するかのように、事故に遭う場面

⁴ レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳（2007年）「ささやかだけれど、役にたつこと」『大聖堂』中央公論社、129頁。

⁵ Raymond Carver, 前掲書, 410頁。

でスコッティーは“birthday boy”⁶と執拗に表現されている。

こうした構図は、アンを精神的に孤立させているように描かれる。アンは、夫が車の中で彼女と同様、神に息子の無事を祈っていたということを知り「そこで初めて彼女は、自分たちは二人一緒にこれに、このトラブルに巻き込まれているのだと感じることができた。」⁷と述べている。これは、あまりにも普段から事態が逸脱しているために、周囲の状況を把握できていないからだ。この点は、アンが病院から出る時にエレベーターの位置がわからなかったり、病院に戻る際にたまたま看護人が出てきたドアをみて「そんなドアがあることに、昨夜、彼女は気が付かなかった」⁸と病院の内部構造が全く把握できていない描写にも具体的に現れている。だからこそ、その孤立からの回復をアンは求める。そして、そのような状況で、類似するトラブルに巻き込まれている黒人家族と遭遇するのもやはり偶然ではない。こうしたトラブルに巻き込まれた人々が滞在するのが病院の普通であるからだ。しかし、アンの視点からすると、同じように息子を失うかもしれないという恐怖に苛まれる家族との遭遇は偶然に感じる。そこでアンはある種の繋がりを感じ、孤立からの回復を目論む。

“She was afraid and they were afraid. They had that in common. She would have liked to have said something else about accident, told them more about Scotty, that it had happened on the day of his birthday, Monday, and that he was still unconscious. Yet she didn't know how to begin”⁹.

“common”という単語は「全員で均等に分けた、共有の」という意の“communis”というラテン語が語源である。ありふれた状況をさす単語で

⁶ Raymond Carver, 前掲書, 403 頁。

⁷ レイモンド・カーヴァー著, 村上春樹訳, 前掲書, 32 頁。

⁸ 同上, 149 頁。

⁹ Raymond Carver, 前掲書, 414 頁。

あるが、フランシス医師が用いた“normal”という、経験していることに重きを置く「普通」を意味する単語と比較すると、他者間での共有に重きのある単語であることがわかる。アンは共通点をこの黒人家族と見出そうとする。しかし、アンが目論見は、その始まりから頓挫する。この時、10代の少女がアンをじっと見つめるのだが、アンはその少女を見た後で、頭をかかえて目を瞑る母親を見る。アンにとって、それは自身の過去と未来を同時に観測しているかのようなこの描写は、アンに現時点での共通点を見出せないことを表している。

(2) アンとパン屋

病院の「普通」に戸惑うアンというこの構図は、実は物語冒頭でパン屋とアンの間で引き起こされている。「彼女は三十三歳になる母親だった。そして世の中の人みんな誰でも、バースデイ・ケーキや誕生パーティといった特別な時期を通過してきた子どもたちを持っているはずだと思っていた。私たちの間にはそう言う共通項があるはずなのだ。なのにこの人はいかにもつつけんどんだ-無礼というのではないが、つつけんどんだ。」¹⁰。しかし実際には、アンの思い込みに反して、パン屋は子供を持つこともなく過ごしてきたのだ。この誤解は、スコッティーの死という悲劇をきっかけに、夫婦がパン屋を訪れることで解消される。ひとしきりパン屋を罵った後で、“It isn’t fair”¹¹と引き起こされた悲劇への理不尽さを呟くアンに対して、パン屋は謝罪と自身の人生、即ち経験してきた普通がどういったものであったのかを夫婦に開示する。この時、“It isn’t fair”は、夫婦の遭遇した理不尽という個別的事実に対するものではなく、パン屋も内包して、個人がそれぞれの理不尽に直面するという普遍的な現実を指すための現在形表現であると読み直したくなる。スコッティーの死が、医師の予想を裏切って引き起こされてもなお、それを病名によってラベリング、即ち普遍化し、病院における order に則って解剖しようとするフランシスに対して“I don’t understand. I can’t, can’t.

¹⁰ レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳、前掲書、120頁。

¹¹ Raymond Carver, 前掲書、423頁。

I just can't”¹²と拒否し、その場を後にした夫婦と病院の関係と、お互いが遭遇した **not fair** を開示することで繋がりを模索しようとするパン屋と夫婦の関係は明らかに対照的である。

前者では、病院の普通に押し込まれたために母アンは自分だけの言葉を探そうとする。

「「駄目。駄目よ」と彼女は言った。「駄目よ。あの子をここに一人置いてはいけない」彼女は自分がそういう声を聞いた。そしてなんてひどいことだろう、と彼女は思った。唯一口から出てくる言葉が、こんなテレビ・ドラマみたいな言葉だなんて。」¹³

しかしながら、実際にはそうした言葉を見つけられないのである。それは、夫婦による事態の悲劇性が、病院における普通によってありきたりなものとなってしまった結果である。

一方でパン屋とは繋がりを得ているように思われる。しかし、スコッティーの入院中、夫婦を恐怖させているのはむしろパン屋からの電話であった。それは、その正体が不明であり、家に帰るタイミングにちょうど電話がかかってきたからである。井出達郎はこの点において、「パン屋の視点から捉え直せば、実際は何度も電話をかけ続けていた」¹⁴のであり、タイミングよくかかってきたように見えるのは夫婦の視点からにすぎないと指摘する。井出はこの電話について「ハワードとアンの視点から語られるその行動は、表面的には単なる嫌がらせにしかみえない。しかしパン屋の視点から出来事を捉え直せば、ケーキをとりに来てもらえないという状況は、確定されていたはずの未来が達成されていないという点で、アンとハワードが経験している“accident”にそのまま重なっている

¹² Raymond Carver, 前掲書, 419 頁。

¹³ レイモンド・カーヴァー著, 村上春樹訳, 前掲書, 154 頁。

¹⁴ 井出達郎 (2016 年) 『「新しい傷」からのつながりに向かって—レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつこと」における“accident”の時間性』 英語英文学研究所紀要, 10 頁。

る」¹⁵。井出の述べる“accident”とは、原因と結果の繋がりを持たず、合理的説明を拒絶する出来事のことである。井出はハロルド・シュヴァイツァーの論を引き継ぐ形で、登場人物たちが未来に対する何かしらの期待をことごとく裏切られることで、特定の対象をもたない期待という希望を待ち続ける点に着目し、彼らの希望が最終的に全て無に帰すために、なぜそのような事態になったのかという原因を問う事態に直面し続けるということを指摘する。しかし、“accident”は、そういった問いを悉く否定する。アンが家から病院に戻る際に、病院を出る前に話した黒人家族の十代の娘のことを思い出し「子供なんて持つもんじゃない」¹⁶と唐突に語るのは、原因を直近の過去に見出せないが故に、その模索が存在の誕生にまで遡行するためである。

唐突にかかってくる電話から夫婦が感じる恐怖の正体は、自分たちが病院に対して抱く理解不能という感情と、実は重なるものであった。そしてその理解不能性とは、原因と結果が合理的に結びつかない不条理によってもたらされていた。だからこそ、孤立から回復するために重要なのは、相手に対して素直に自己をさらけ出しているかどうかである。「パン屋でよかった」と彼が言う時、この出来事によって本当に救われたのは、ずっと孤独に生きていたパン屋であり、だからこそこの物語は、夫婦の悲しみがいつか誰かの偶然によって救われる可能性を示唆するに至るのである。

結論

Raymond Carver の短編“A Small, Good Thing”は、accident に見舞われたことにより、幾つかの異なる「普通」を行き交う夫婦が、夫婦にとっての「普通」を過ごせなかった名もなきパン屋との対話によって、悲しみを克服しようとする物語である。異なる normal を擁する空間を行き来する夫婦が最後に行き着くのは、自分たちが擁する normal とはことなる生活を送りながら、孤独に働き続けるパン屋であった。パン屋にとっての普

¹⁵ 井出達郎，前掲書，10 頁。

¹⁶ レイモンド・カーヴァー著，村上春樹訳，前掲書，148 頁。

段の世界は、夜に仕事をして日中にパンを売る小さな店の中だけである。外の世界を知らないパン屋というのは、即ち外との繋がりを持たないということであり、アンの“But, of course, you couldn't be expected to know that, could you? Bakers can't know everything—can they Mr. Baker? But he's dead. He's dead, you bastard!”¹⁷という息子の死を告白した後に続く罵りの台詞は、まさにその繋がり無し様をパン屋に指摘するものとして読む事ができる。ここで繰り返される逆説が、スコッティーの死とパン屋が何も知らないと言うことを対比させるのは、当然論理的な文脈におけるものではない。ここでの逆説の繰り返しは、パン屋は何も知らないという当たり前を夫婦の「普通」に織り込み、その上で、息子の突然の死という「普通」の喪失を対比させるものである。しかし、この夫婦のパン屋に対する解釈は、パン屋が夫婦の考える社会通念上の普通からすでに外れているため成立していない。それは、この年齢くらいの子供を持つこともなく歳を重ねた孤独とは相容れないものだ。パン屋は、この点を言い訳にして、自身の過失を贖罪しようと夫婦に語りかける。夫婦も、パン屋の孤独な人生を知り、お互いが普通とは相容れない立場に置かれているという点において、逆説的に対比させるものではないことに気がつく。そして今度は一転して、共通点を見出そうと耳を傾ける。

パン屋が押し入る夫婦に対して“What do you want?”¹⁸と現在形で問いかけるのは、本来ケーキを受け取りに来るはずだった夫婦に対して「今更何が欲しい」というニュアンスがある。これに対してその場では何も答えずに、しばらくしてから“I wanted you dead.”とアンが過去形で言うのは、現在時において求めるものが無いためである。しかし、実際には夫婦はスコッティー¹⁹の誕生日に受け取るはずだったケーキを思い出すようにしてパン屋をわざわざ訪れ、過去に正体も知らずにパン屋に求めた怨みを精算するように現在のパン屋に糾弾している。言葉の上には現れない何かを夫婦が明確な意志を持ってパン屋に求めているということが、夫婦の現在に

¹⁷ Raymond Carver, 前掲書, 423 頁。

¹⁸ 同上, 422 頁。

¹⁹ Raymond Carver, 前掲書, 423 頁。

おける喪失感を読み取れば読み取るほどに鮮明になる。今後の研究において、この点を具体的に明らかにし、Carver 文学のさらなる価値の究明に尽力したい。

[参考文献]

Raymond Carver (2009年) *Collected Stories*, New York: Library of America.

井出達郎 (2016年) 『「新しい傷」からのつながりに向かって——レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつこと」における“accident”の時間性』英語英文学研究所紀要。

紀平英作 (2019年) 『アメリカ史』山川出版社。

レイモンド・カーヴァー著, 村上春樹訳 (2004年) 『必要になったら電話をかけて』中央公論新社。

レイモンド・カーヴァー著, 村上春樹訳 (2007年) 『大聖堂』中央公論新社。